



『山口県の民謡』と『阿東町の俚謡』（文書館図書）

戦いノオト④

幕末の歌(3) ～ヨイショコショ節～

ヨイショコショ節は、『日本民謡大観 中国篇』（日本放送協会、1969）によると、

七七七五の詞型のあとに「ヨイショコショーデヨサノサー」の囃し詞が入るところからこの名があり、山口県を中心として広く中国地方の各地で謡われている。これら一連の「ヨイショコショ」は、土地によって節廻しが少しずつ異なるところから、その名を冠せて「××ヨイショコショ」などと呼んでいるがいずれも大同小異である。曲の感じではさほど古いものとも思えず、幕末の流行歌が何かではないかと思われるが、源流を求める手掛りはまったくない。ともあれ中国地方での酒宴には必ずといっていいほど飛び出す唄である

とあり、『山口県の民謡』（山口県教委文化課、1983）の解説では、

熊毛郡上関町では奇兵隊にはいついた者が持ち帰ったものだといわれ、大島郡橘町では文久年間（1861-63）からはやったものだといわれている。また一説には高杉晋作が作った奇兵隊行進曲といわれている

とあります。県内では祝い歌をはじめ、さまざまな歌詞で幅広く採集されていますが、幕末の時局や事件を生々しく題材にしたも

のが多くみられ、幕末の武士たちに人気の節だったことがうかがえます。

文久3年（1863）から翌年にかけては、下関での攘夷攻撃に始まり、8月18日の政変、四国艦隊による下関砲撃、禁門の変に続く幕府との四境戦争と、長州藩にとってはたいへんな事件が続きました。とくに四境戦争の勝利は酒宴の場での大話の話題を提供し、それらが次第にヨイショコショ節の形をとっていったものと考えられます。

それらについて、いくつか紹介します。

◆関はよいしょこしょうで 前田の沖で
うまく焼きます薩摩芋
アラヨイショコショーデ イヤサノサ
薩摩芋 ハーコラコラ

*この歌詞は、文久3年12月20日に勃発した、長州軍による薩摩商船長崎丸の砲撃・撃沈事件を歌ったものです。当時の薩長は、いわゆる「8月18日の政変」を受けて、強い緊張関係にありました。

◆長州殿様力が強い
三十六万石棒にふる
ヨイショコショデエーエ ヨサノサア
棒にふる

*大義のためなら藩すら捨てる、という意味でしょうか。



『日本民謡大観 中国篇』の「ヨイショコショ節」（文書館図書）

NHK職員であった町田佳聲（かしょう、嘉章）が戦前から収集した膨大な民謡音源は現在もNHK資料室に保管され、書物として大部な『日本民謡大観』（1944-80）に結実しています。

柳田國男の指導を受けつつ、「歌が日本人のどういう場面で、どういう風に使われたか」にこだわった採集は、歴史資料としての一面を持っています。

◆三千世界のカラスを殺し
主（ぬし）と朝寝がしてみたい
ヨイショコショデエーエ ヨサノサア
してみたい
*高杉晋作といわれる都々逸を取り入れています。

◆磨きあげたる剣の光
雪か氷か下関
ヨイショコショデエーエ ヨサノサア
下関

◆菊が開けば葵（あおい）が枯れる
長州沢瀉（おもだか）花が咲く
ヨイショコショデエーエ ヨサノサア
花が咲く
*菊は皇室、葵は徳川、沢瀉は毛利の紋であり、それぞれの消長をうたっています。

以上の歌詞は『山口県の民謡』から抜粋したものです。
音源は、山口県立山口図書館で聞くことができます。

ヨイショコショ節に限らず、俚謡は即興で随時作詞されたものが、決まった節に乗せて次第に広まっていったものも多く、地方色に富むものです。

下に紹介するのは、元治元年（1864）の四境戦争において、大村益次郎率いる長州軍が「石州口の戦い」で幕府軍を破ったときの舞台となった近辺で採集されたヨイショコショ節です。石州口の陣営や近辺で歌われ、阿武郡地方に歌い継がれてきたものでしょう。大村益次郎の高笑いが聞こえてくるようです。

これら石州口関係の歌詞は、伊藤武が昭和36年に「防長民俗叢書」の一冊として刊行した『阿東町の俚謡』に収載されているものです。当館の「明治38年童話伝説俗謡取調書」（県庁戦前A教育67）にも同様の歌がいくつか採訪されています。

◆関と小倉を櫓（たすき）にかけて
島（縞）にお（織）ります巖流島（縞）
アラヨイショコショデ エエイヤサノサ
巖流島
*武蔵と小次郎の決闘にかけて、小倉口の戦いを歌ったものでしょう。

◆長州攻めに来て我攻められて
猫の頬被りで後ずさり
アラヨイショコショデ エエイヤサノサ
後ずさり
*猫に頬被り（ほっかむり）すると、後ずさりして嫌がります。

◆紀州行灯（あんどん）浜田で灯（とも）す
長州嵐が吹き消した
アラヨイショコショデ エエイヤサノサ
吹き消した
*「紀州の行灯」は幕府軍総督であった紀州藩重臣の安藤飛騨守のことをさします。

◆浜田殿様たえがとうはないか
長州攻めに来て攻められた
アラヨイショコショデ エエイヤサノサ
攻められた
*「たえがたい」は長州の方言で、恐縮することをいいます。浜田の殿様を揶揄しています。

◆浜田殿様にあげたいものは
白木三宝に九寸五分
アラヨイショコショデ エエイヤサノサ
九寸五分
*白木の三方（さんぼう）に9寸5分の短刀を乗せて運んでくるのは、切腹の時の作法です。

◆浜田殿様鯛（いわし）か雑魚（ざこ）か
鯛に追われて皆逃げた
アラヨイショコショデ エエイヤサノサ
皆逃げた
*鯛は長州藩の「隊」を意味します。この掛詞と比喻は当時の長州で人気があったようで、よく使われました。（シートNo.20参照）

◆浜田殿様たえがとうはないか
六万石をも棒にふり
アラヨイショコショデ エエイヤサノサ
棒にふり
*こちらは、いうまでもなく幕府軍の主力であった浜田藩の敗北をうたっています。